

I 調査の概要

1. 調査目的

加古川市の子どもたちを取りまく読書環境を充実させていくうえで指針となる「子どもの読書活動推進計画（第4次）」の策定にあたり、加古川市の児童、生徒および保護者に対し、読書に関する意識や読書実態を把握するため、この度「子どもの読書活動実態調査」を実施した。

2. 調査概要

- ・調査対象：
 - * 市立小学校の児童および市立中学校の生徒
 - * 市内県立高等学校に通学する生徒
 - * 市立加古川養護学校に通学する子どもの保護者
 - * 市立幼稚園、市立保育園、市立認定こども園に通園する5歳児の保護者
 - * 市内公共施設利用者のうち未就学児の保護者
- ・調査期間：令和5年6月26日～令和5年7月31日
- ・調査方法：配布、回収またはGoogleフォームにて実施

3. 回収状況

対象		対象人数	回答数	回収率(%)
小学校（28校）	1年生	430	410	95.3
	2年生	487	422	86.7
	3年生	464	428	92.2
	4年生	480	453	94.4
	5年生	536	507	94.6
	6年生	580	530	91.4
	合計	2,977	2,750	92.4
中学校（12校）	1年生	172	157	91.3
	2年生	155	128	82.6
	3年生	164	120	73.2
	合計	491	405	82.5
高等学校（6校）	1年生	77	77	100.0
	2年生	78	78	100.0
	3年生	76	67	88.2
	合計	231	222	96.1
児童・生徒合計		3,699	3,377	91.3
養護学校	保護者	52	34	65.4
幼稚園・保育園・認定こども園	5歳児保護者	402	322	80.1
子育て施設・図書館(室)	未就学児保護者	250	249	99.6
保護者合計		704	605	85.9
総合計		4,403	3,982	90.4

3. 調査結果まとめ

【児童・生徒】

○読書に対する意識

- ・読書が好きかについては、すべての学年の70%以上の児童・生徒が「好き」（「好き」または「どちらか」として好き）と回答しています。また、学年が上がるにつれて「好き」の割合が減少傾向にあり、学年によって読書に対する意識が変化しています。

○読書量

- ・1ヶ月の読書冊数については、学年が上がるにつれ読書量が減少する傾向にあります。

○本を読む理由と読まない理由

- ・本を読む理由については、小学校中学年では「読むのが楽しい」、小学校高学年以降では「いろいろ想像するのが楽しい」の割合が最も多くなっています。すべての学年において、本を読む理由として楽しさをあげている児童・生徒が多いです。
- ・また、「新しい知識を得ることができる」や「自分の考えが広がったり深まったりする」といった自己の成長を理由とする回答も多くあげられています。
- ・本を読まない理由については、小学校中学年では「スポーツをしたりする方が楽しい」、小学校高学年以降では「テレビやゲームで遊ぶ方が楽しい」の割合が最も多くなっています。すべての学年において、本を読まない理由として「スポーツやテレビ・ゲームの方が楽しい」をあげている児童・生徒が多いです。
- ・また、高校生では他の学年では見られない「読みたいが勉強・部活動のため読む時間がない」といった回答も多くあげられており、学生生活の変化が原因であると考えられます。

○図書館の利用状況

- ・1週間の学校の図書館および学校以外の図書館の利用回数については、どちらも学年が上がるにつれ図書館の利用回数が減少する傾向にあります。
- ・学校以外の図書館を利用しない理由については、すべての学年で「読みたい本は買って読む」の割合が最も多く、小学校高学年では「図書館が家の近くにない」も高くなっています。
- ・また、「忙しくて図書館に行く時間がない」といった回答も多くあげられています。

○図書館に期待すること

- ・学校の図書館に期待することについては、すべての学年で「もっといろいろな本をそろえる」の割合が最も多くなっています。学校の図書館に本の種類の充実を期待している児童・生徒が多いです。
- ・また、小学生では「借りられる本の数をふやす」や「本を探しやすくする」、中学生と高校生では「いつでも利用できるようにする」といった回答も多くあげられており、学年によって期待する内容が変化する傾向にあります。
- ・学校以外の図書館に期待することについても同様、すべての学年で「もっといろいろな本をそろえる」の割合が最も多くなっています。学校以外の図書館にも本の種類の充実を期待している児童・生徒が多いです。
- ・また、「本をさがしやすくする」や「本を借りられる期間を長くする」といった回答も多くあげられています。

○家庭での読書環境

- ・家族の読書状況については、「読んでいる」（「よく読んでいる」または「時々読んでいる」）の割合が小学校低学年、中学生、高校生では 30% 台であるのに対し、未就学児、小学校中学年、小学校高学年では 50% を超えています。
- ・「家族に本を読んでもらうか」については、「はい」の割合が未就学児では 80.0% であるのに対し、小学校低学年では 36.8% となっています。学年が上がるにつれ家族に読んでもらう機会が減少し、自ら読書をする傾向にあります。
- ・「小さいころに家族に本を読んでもらったか」については、すべての学年の 70% 以上の児童・生徒が「読んでもらった」（「よく読んでもらった」または「たまに読んでもらった」）と回答しています。
- ・「家族と本のことについて話をすることがあるか」については、学年が上がるにつれて「ある」（「よくある」または「たまにある」）の割合が減少し、本について家族と話す機会が減少する傾向にあります。
- ・「家族に本をよく読むように言われることがあるか」については、学年が上がるにつれて「ある」の割合が減少傾向にあります。経年では、家族から読書について言われる機会が増加する傾向にあります。
- ・「家に自分の本を持っているか」について、すべての学年の 90% 以上の児童・生徒が「ある」（「10 冊以上ある」または「10 冊未満だがある」）と回答しています。学年が上がるにつれて「10 冊以上ある」の割合が減少しています。所有する本の冊数が減少する傾向にあります。
- ・「家庭での読書環境と児童・生徒の読書に対する意識の相関」については、すべての学年で「家族が普段から本を読んでいる」、「小さいころに家族に本を読んでもらった」と答えた児童・生徒ほど、読書が「好き」の割合が高い傾向にあります。

○電子書籍

- ・「紙以外の本で読書することがあるか」については、すべての学年の 50% 以上の児童・生徒が「活用していない」（「いいえ」または「ほとんど読まない」）と回答しています。
- ・「電子書籍の活用状況と学校以外の図書館の利用状況の相関」については、すべての学年において「活用している」と答えた児童・生徒ほど、図書館を「利用する」（「よく利用する」または「時々利用する」）の割合が高くなっています。

【保護者】

○子どもの読書活動の意義に対する認識

- ・「子どもの成長において読書は重要だと考えるか」について、97.9%の保護者が「重要」（「とても重要」または「まあまあ重要」）と回答しています。

○家庭での読書環境

- ・「子どもに読み聞かせをするか」について、80.0%の保護者が「する」（「よくする」または「時々する」）と回答しています。

○保護者の子どもの読書活動に対する意識および読書状況と読み聞かせ実施状況の相関

- ・「子どもの読解力を育てるうえで読み聞かせの実施状況の相関」については、「読む」（「よく読む」または「時々読む」）と答えた保護者ほど、読書が「重要」の割合が高い傾向にあることがうかがえます。
- ・「読み聞かせの実施状況と子どもの読書活動に対する認識相関」については、「する」と答えた保護者ほど、読書が「重要」の割合が高い傾向にあります。

○子どもの本の用意方法と保護者の読書状況および属性の相関

- ・「子どもの本の用意方法と保護者の読書状況および地域・年齢との相関」については、保護者の読書頻度、居住地域、年齢にかかわらず、「自分で買う」の割合が最も多くなっています。

○読み聞かせ実施状況と子どもから本を読んでほしいとせがまれるかの相関

- ・「読み聞かせの実施状況と本の読み聞かせをせがまれるかの相関」については、「読む」と答えた保護者ほど、せがまれることが「よくある」（「よくある」または「時々ある」）の割合が高い傾向にあります。

○公共図書館に望むこと

- ・公共図書館に望むことについては、「たくさん本をそろえる」の割合が最も多くなっています。児童・生徒と同様、保護者においても図書館に本の種類の充実を望んでいると考えられます。
- ・また、「子どもの本の紹介や情報を知らせる」や「おはなし会など子ども向けの事業の開催」といった回答も多くあげられています。

○子どもの読書活動の推進に重要なこと

- ・子どもの読書活動の推進を図るうえで最も重要だと思うことについては、63.6%の保護者が「家庭での読書習慣の定着」と回答しています。次いで、「幼稚園・保育園の図書コーナーや学校の図書室の充実」、「公共図書館の充実」の順となっています。

○はじめまして絵本事業の認知状況

- ・はじめまして絵本事業について、41.3%の保護者が「知っている」と回答しています。平成26年度から増加しているものの認知度は半数以下にとどまっており、認知を促す取り組みが必要であると考えられます。